

【書評】

小畑精和著

『カナダ文化万華鏡——『赤毛のアン』からシルク・ドゥ・ソレイユへ』 明治大学出版会、2013年

OBATA Yoshikazu, *Le kaléidoscope culturel canadien*, Meiji University Press, 2013.

立花英裕

TACHIBANA Hidehiro

「万華鏡」というだけあって、あらゆるものが詰め込まれていて、小畑氏の教養の深さ、関心の広がり、規模に驚く。副題には「『赤毛のアン』からシルク・ドゥ・ソレイユへ」とあるが、たしかに、本書には、文学から映画、舞台芸術、アニメまで、著者のカナダに対する理解の深さを示す知識・体験が詰め込まれている。モントリオールの街、各地の特質、歴史、シャンソン、エンターテインメント、嗜好品と、縦横無尽に語られ、まさに万華鏡なのである。更には、カナダとアメリカ合衆国の比較論、カナダ内の英系と仏系の比較論などが様々な角度から展開されていて、単純なカナダ文化論の枠にはとても納まり切らない。

本書の中核にあるのはカナダ文学論である。著者の『ケベック文学研究』（2003年）は、当時日本ではよく知られていなかったケベックの文学作品を個別に、その粗筋も含めて紹介し、ケベック文学の全体像をはじめて論じた大作であった。本書においても、個々の作品を丁寧に紹介するという基本的なスタイルは受け継がれているが、フランス語系の作品だけでなく、英語系の作品も積極的に取り上げられている。『赤毛のアン』や映画『タイタニック』のように、日本でよく知られている作品も狙上に載せられている。

しかし、本書は個々の作品論に留まるものではないし、個別作品の文学史的な位置づけでもない。著者は、まず映画『タイタニック』の中から、カナダ的なサバイバル思想を取り出した上で、イギリス系のサバイバル小説『赤毛のアン』とフランス系の『マリア・シャブドレーヌ』の相違点と共通点を浮き彫りにすることによって、総体的なカナダ文化論への道を切り拓く。とはいえ、永遠不滅のカナダ文化があるということではなく、むしろ逆に文化の

捉えがたさ、あるいは、移民文学の検討などを通して異なる文化相互の交流や変化が引き起こす問題へと次第に視点をずらしていく。

「あとがき」によれば、本書は大学で長年行ってきた講義の蓄積が基礎になっているとのことだが、「です・ます」調の文体で、学生への配慮を感じさせるような読みやすく、分かりやすい文体が貫かれている。しかし、その背後にはストラテジックな気配りが見え隠れもする。

少し話が横道に逸れてしまうが、最近、必要があってフランスの詩人ルイ・アラゴン Louis Aragon の『国民詩日記 Journal d'une poésie nationale』というのを読んだ。当時の詩壇に君臨していたアラゴンは、フランスの伝統に立ち帰って定型押韻詩を書くべきだと説いているが、この「国民詩論」(1954年前後)はフランコフォニーの詩人たちにも大きな反響を呼び起こした。それはともかくとして、ここで急にアラゴンを持ち出したのは、亡くなったエリュアール Paul Éluard に思いを馳せているからである。エリュアールは、1952年に狭心症のために57歳で亡くなっている。アラゴンは、エリュアールが最期の数週間、なにを考えていたのだろうかかと執拗に自問しているのである。さて、本書も著者が亡くなる少し前に出版された本であり、アラゴンとは立場が全く異なるが、私にとっても、小畑氏は何を考えていたのだろうかという思いなしに読むのは難しい。本書は、評論ないし研究書なのだから、もっと客観的に読むべきなのかもしれない。しかし、著者自身も「あとがき」の中で、本書が彼の闘病生活と深いつながりがあることを強調している。著者は、読者に何かを訴えているのである。

そうした目線で本書を辿っていくと、すぐに引っかかってくる語が幾つかある。「現実」、「好奇心」、「力」、さらには「苦しむ力」といった語群だ。「現実」はよく使われる言葉であり、「現実と向き合う」といわれてもあまりに平凡で、うっかりすると、学生が受け入れやすいことを言っているだけに聞こえないでもない。しかし、著者は、一見手垢のついているように見える言葉を用いながら、型に嵌まらない思考に読者を誘っていくストラテジーに苦心を払っている。

本書に様々な視点からの比較論が展開されていることは既に述べたが、その出発点に、マーガレット・アトウッドによるカナダのサバイバルの類型論が置かれている。それによれば、サバイバルは、①「犠牲者であることを否定する」態度、②「犠牲者であることは認めるが、それを運命のせいにする」

態度、③「犠牲者であることを認めるが、その役割を演じることを拒否する」態度、④「創造的な非犠牲者」の態度と、4つに大別される。このアトウッドの類型論を参照しつつ、各作品の登場人物たちが「現実」にどのように立ち向かっているかが検討されるのである。

たとえば、ルイ・エモン『マリア・シャプドレーヌ』では、ロレンゾと一緒にアメリカ合衆国に行くかどうか迷ったマリアは、最終的に開拓地に留まる決意をする。これは、①の「犠牲者であることを否定する」態度である。主人公は、「近代化から取り残されている犠牲者である」（115頁）ことを否定している。伝統文化は現実から目を背けて閉じこもるための殻のようなものになる。

このような、見えているようでいて見えにくい「現実」論で特に興味深いのは、ガブリエル・ロワ『束の間の幸福』のフロランチヌ・ラカスとジャン・レベックである。戦時中、貧しい家庭の娘フロランチヌはジャンとの束の間の恋にうっとりとして、フランス系住民が置かれた立場に目をむける広い視野をもてない。他方、ジャンは、一時フロランチヌに惹かれるが、すぐに自分と生活を共有できない女であると見抜き、彼女を捨てて、貨幣経済が支配する世界に飛び込んでいく。小畑氏は、ガブリエル・ロワの冷酷といってもいい、厳しい眼差しを読み取っており、「キッチュを照射する視点」がジャンを通して作品内に設定されていることを指摘する。フロランチヌは、口紅を塗りたくり、滑稽なほど現実が見えていない、キッチュな女なのである。しかし、出世主義のジャンにも限界がある。

ここで、著者が導入してくる概念が「好奇心」である。ジャンの限界は差別意識として現れており、価値観を異にする者に目を向ける「好奇心」が欠けているのである。ジャンも①のタイプだが、出世主義を越えたより客観的な視点にまで突き抜けて世界を見ることはできない。小畑氏によれば、独善的な自足意識から抜け出るためには「好奇心」が必要なのである。「好奇心」は、ミシェル・フーコーの「知への意志」を言い換えた言葉のようで、偽の現実を見抜くために不可欠な「力」である。「好奇心」は単なる知性ではなく、1つの「力」なのであり、どうも生命という概念にリンクしているようである。

深読みかもしれないが、「好奇心」「力」「生命」は、隠れた分節を形成していて、生命論の次元を本書内部に開いている。特にフレデリック・バック論、『アガグック物語』論、ネゴヴァン・ラジック『モグラ男』論などは、

立派な生命論である。フレデリック・バックの章には「力」が繰り返し用いられる一節がある—「現代文明に浸っているわれわれ〔は〕喜び悲しむ力、苦しみ楽しむ力、そして何よりも考える力を見失っている」。「現実主義」とは、時代の支配的な価値観に囚われていたり、日常に流されたりしているために、生命「力」を喪失している状態のようである。小畑氏の言う「現実を見る」とは、そうした喪失状態に気がつくことなのである。ここには、現代生活が隠蔽している「生命」の再発見がある。

この生命論の、いわば最深部が『モグラ男』論である。たとえば、主人公は、子供の頃、雨を眺め水溜まりの表面に無数の泡ができるのを眺めていたことを回想する。この水の運動は生命の律動であり、小畑氏は明言していないが、生命から発生する、根源的な意味作用を表しているにちがいない。水滴の飛沫は、「幾世代にもわたる生と死の繰り返し」（325頁）を語っているのである。優れた文学の特徴は、意味の生成と解体の運動、つまり宇宙的な視点へと読者を誘うところにある。

小畑氏は、「現実」とイメージやイデオロギーを取り違えないようにと、読者に訴えている。たとえば、かつて日本で「らい予防法」が制定されたとき、「らい患者の楽園を造る」（308頁）と宣伝されたが、実際に出来上がったものは、楽園からはほど遠い抑圧の施設だった。同じように、今日、「多文化共生」論が語られるとき、それが「問題を隠蔽してしまう行政の側の便利な道具」（377頁）になってはいないか疑問を抱く視野を持たなければならない。そのような視野は、生命力に忠実な好奇心によって開かれると、究極的には言っているように思えるのである。

それでは「真理」とはなんだろうか、ということになるが、小畑氏はそのような絶対的なものはないとも断言している。それでは、なぜ人は考えたり、書いたりするのだろうか、という疑問が次に出てくる。それに対する回答は、ジャック・ゴトブー『やあ、ガラルノー』論に読み取れるようだ。表現とは、「現実と書く人との関わり」（275頁）なのである。「現実」を実体的に想定するのは誤りで、「現実と自分との関係をどう表現していくのが重要なのである」。

小畑氏の考察は、文学や人文科学の意義を問うているようでもある。たとえば、少し突飛だが、犬の寸法や体重などの数値が提供されたからといって（22頁）、それが犬の客観的な真実と思っただけとはいけない。むしろ、数値的データはかえって「現実」を見えなくするために利用されることがある。この

ような似非「科学」を見破る知性（好奇心）の形式を、小畑氏は、文学や人文科学に求めているのではないだろうか。

最後になるが、「国境を越える文化—グローバル時代の『赤毛のアン』」は優れた現代文化論である。『赤毛のアン』が日本でテレビアニメ化され、モンゴメリが外見の可愛くない女の子として描いたアンが可愛い女の子に変身させられたが、それがカナダでも人気が出て受け入れられたことを論じている。そのようなトランスナショナルな文化現象に直面する現代において、「カナダ文化」とは何なのだろうか。私たちは、ルイ・アラゴンが「国民詩」を論じた時代からは遥かに遠いところまで来てしまったのである。

ところで、アトウッドの類型論における「犠牲者」を「病気」に置き換えて読み直したら、どうなるだろうか。小畑氏のサバイバル思想は、あきらかに③なのである。

（たちばな ひでひろ 早稲田大学教授）